様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：２６４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１７２２２

研究課題名（和文）省察的実践を志向したスクールソーシャルワーク現任教育方法の研究

研究課題名（英文）A study of education method for school social worker toward reflective practice

研究代表者
加藤　由衣（Yui, KATO）

高知県立大学・社会福祉学部・助教

研究者番号：３０６１１９９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、スクールソーシャルワーカーによる省察的実践を導く現任教育の方法モデルの構築を目的に、理論研究と質的研究を行った。その成果として、まずスクールソーシャルワークにおける省察的実践の理論的特性を提示した。また、現任教育方法の特徴を整理し、スーパービジョン機能にみられる省察の促進要因を分析することで、スクールソーシャルワーカーの省察的実践を促進する現任教育の方法展開の特性を示した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to establish the educational model for school social worker toward reflective practice. This study was carried out from literature research and qualitative research. As a result, this study proposed the theoretical characteristics of reflective practice. In addition, through examination of educational features and analysis of factors for promoting reflection included in supervision functions, the characteristics of educational method for promoting reflective practice were showed.

研究分野：社会福祉学

キーワード：スクールソーシャルワーク　省察的実践　研修　スーパービジョン　実践知　批判的省察

１．研究開始当初の背景

本研究は、近年学校現場で認知度が高まりつつあるスクールワークにおいて、省察的実践の可能性を探究したいと考えたことがきっかけである。スクールソーシャルワーカー活用事業は 2008 年度の創設以来、徐々に全国で拡大しており、文部科学省によると、2016 年度には全国で 1,780 人のスクールソーシャルワーカーが配置されている。こうした状況のなかで、わが国におけるスクールソーシャルワーク実践の定着や専門性の担保・向上の必要性が指摘され、スクールソーシャルワーカーの教育やスーパービジョンに関する研究が行われるようになってきた。

しかし、スクールソーシャルワーカーの現任教育に関する研究動向をみると、教育システムの構築やスーパービジョン・システムに関する研究が始まったところであり、まだその方法論を探究するものは少ない。また、教育する立場からの研究が中心で、スクールソーシャルワーカーの視点を起点にしたものは少ないのが現状である。

一方でソーシャルワーカーの専門職モデルとして近年注目されているのが、Schön, D.（1983）の提唱した省察的実践家である。省察的実践家は、実践を行いながら状況と対話する「行為のなかの省察」と、実践を対象化して検討する「行為についての省察」を重視する。この実践スタイルが、わが国のソーシャルワークでも重視されるようになり、省察的実践家の紹介や省察概念の整理が行われてきた。

特にスクールソーシャルワークにおいては、学校現場に唯一の社会福祉専門職として参入するため、利用者の複雑な状況に対応しながらも単独で実践する状況が多い。そのため、同じソーシャルワーカーの立場から日常的に支援を相談する相手がいない。このような特徴を有するスクールソーシャルワーカーには、省察的実践家の実践スタイルが重要と考えた。しかし、スクールソーシャルワークの領域で省察的実践に関する研究はほとんどみられない。そのため、スクールソーシャルワークにおいて省察的実践を促進する教育モデルを構築することは課題である。

２．研究の目的

本研究では、近年重視されている省察的実践に着目し、スクールソーシャルワーカーの省察的実践を促進する現任教育の方法モデルを構築することを目的とする。特にそこでは、現任教育の方法がスクールソーシャルワーカーの省察する力の向上に与える影響と機能を明らかにすることで、その内容を教育方法へとフィードバックし、スクールソーシャルワーカーの省察的実践を導く現任教育の方法モデルを探究していきたいと考えた。そのため、教育方法モデルの構築を目標に、以下の課題に段階的に取り組むこととする。

（１）スクールソーシャルワーカーに求められる省察的実践家の理論的特性（専門職モデル、思考スタイル等）の整理と確立

（２）多様な現任教育（研修、スーパービジョン、事例検討等）にみられる教育特性の追究

（３）スクールソーシャルワーカーの視点からとらえた、実践に与える現任教育の影響（特に省察する力の向上に寄与する要因）の検討

（４）スクールソーシャルワーカーの省察的実践を促進する現任教育の機能の明確化

（５）上記をふまえ、省察的実践を導くスクールソーシャルワーカーに対する現任教育の方法モデルの提示

３．研究の方法

本研究は、スクールソーシャルワーカーの省察の力を高める現任教育の方法モデルの確立に向けて、理論研究と質的研究の二側面から研究を進めた。具体的には、以下の方法・内容で実施した。

（１）スクールソーシャルワークの理論的基盤（エコシステム、アセスメント、エンパワメント等）と専門的力量の特性整理

（２）Schön の研究を中心とする省察的実践の理論的特性の検討（専門職モデルとしての特徴や視座、思考スタイル等）

（３）スクールソーシャルワークにおける現任教育の特徴の整理（研修、スーパービジョン等）

（４）現任教育にみられる省察的実践を導く特性の分析（教育の過程や技法、省察の力を高める要因等）

（５）（１）～（４）の研究結果をふまえた、スクールソーシャルワーカーの省察的実践を促進する現任教育の方法展開の検討

なお本研究は、高知県立大学社会福祉研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 社研倫 16-4 号 2016 年 6 月 22 日）。

４．研究成果

（１）スクールソーシャルワークの活動特性

スクールソーシャルワーク実践は「学校を基盤」としており、教育行政に身を置きつつ、教育とは違う立ち位置から子どもや家庭の支援を展開していくことが、大きな特徴である。この実践の特徴に、スクールソーシャルワーカー特有の困難さが含まれると考えられる。それは、学校が指導を基本とした集団組織であり、福祉の視点（支援）とは異なる教育の視点を有していることである（岩永 2011）。異なる視点の存在自体は、複眼的視点からの子どもの理解という面で有用である。しかし、単独で学校に介入することの多いスクールソーシャルワーカーにとっては、同じ視点から子どもや家庭の状況を把握し、

その場で支援を検討できる同僚や仲間がいない状況となる。このことは、スクールソーシャルワーカーの活動特性であり、かつ実践の困難さの要因であることがわかった。そしてそれゆえ、スクールソーシャルワーカーによる省察的実践が必要であると理解できた。

（２）省察的実践の理論的特性

省察は、学ぶために省察し、あるいは省察の結果として学ぶ（Moon2004）といわれるように、一般的に、学習と関連の強い概念と理解されている。そのため、省察的実践の特性も、省察する実践家であり続けるなかで、学び、専門職としての力を高めていくことが大きな特徴となる。また、近年の省察的実践の研究では、実践や出来事そのものをふり返るだけでなく、より広い視野で状況を捉える重要性が指摘され、reflexivity や critical reflection といったクリティカルな視点が注目されている（Bolton2014；Bradbury2010）。こうしたことから、１）省察をとおした専門職としての発達と２）クリティカルな視点という２つの観点から、省察的実践の実践特性の理論分析を行った。

分析から、１）省察をとおした専門職としての発達にかかわる省察的実践の実践特性を、①「行為の中の省察」による状況との絶え間ない対話と、「行為についての省察」をとおした自己と対話が行われること、②不安や経験へのオープンさや探究の姿勢が求められること、③記録をとおして省察が促進されること、④省察から新たな知識が創造されること、の４点にまとめた。

また、省察的実践の２）クリティカルな視点の実践特性は、①自己の基盤や社会システムを問い直し、その相互の影響を認識すること、②自身とは異なる意見を積極的に取り入れる姿勢が求められること、③他者との対話から省察が促進されること、④省察によりエンパワメントが促進されること、の４点に整理できた。

これらの分析をふまえて、省察的実践では、自らの行為を見つめ、そこに介在する実践知を明らかにし、未来の実践に役立てることと、社会システムやソーシャルワーカー自身、そしてそれらが利用者に与える影響を問うことが重要と理解できた。そして省察的実践には、自己に対する省察、社会に対する省察、そしてその相互作用に対する省察という３側面がみられた。そこで、この３つの対象への省察を軸に、省察的実践の実践特性を表１にまとめた。

表１　省察的実践の実践特性

対象	自己	相互作用	社会
内容	・「行為についての省察」 ・自己基盤の問い直し	・「行為の中の省察」 ・自己と社会の相互影響の認識	社会システム・構造へのクリティカルな視点
姿勢	不安や経験への寛容さ、探究	異なる意見や相違への寛容さ	
方法	自己との対話、記録	状況との対話・他者との対話	
効果	知識の統合・創造	エンパワメント	

（３）スクールソーシャルワークにおける省察的実践の意義

スクールソーシャルワークの活動特性と省察的実践の理論的特性をふまえ、スクールソーシャルワークにおける省察的実践の意義として、以下４点が提示できた。

①スクールソーシャルワーク実践における帰納的な実践モデルの探究を促進すること

②教育現場という異なる文化に属するなかで、多角的な視点で現状把握を可能にすること

③学校、スクールソーシャルワーカーが子ども・家庭に与える影響への視点が定着すること

④社会システムなど多様なシステムの相互影響を含めて、子ども・家庭のエンパワメントを促進すること

（４）スクールソーシャルワークにおける現任教育の特徴

『スクールソーシャルワーカー実践活動事例集』（文部科学省）をみると、多くの自治体が研修会とスーパービジョンによってスクールソーシャルワーカーの質の向上を図っていることがわかる。そこで、この２つの教育方法の特徴を文献研究と研究査から分析し、省察的実践と関連づけながら表２のとおり整理した。

表２　省察に着目した研修とスーパービジョンの教育特性

研修	特性	スーパービジョン
・新たな知見の獲得 ・自己基盤の問い直し	①目的	・実践事例の課題解決 ・「行為についての省察」の実施
・グループ演習による間接的実践体験 ・他者との対話	②展開	・直接素材による課題解決 ・自己との対話
・「行為の中の省察」（理論を状況に適用する力）の力の向上 ・異なる意見を受け入れる姿勢の獲得	③効果	・実践知の言語化（形式知への転換） ・自己や社会への批判的視点の獲得

また分析をとおして、スーパービジョンはSchönの指摘する「行為についての省察」そのものであり、省察的実践を促進する要素が含まれることがわかった。そこで、スーパービジョンの内容や展開を検討することで、省察的実践を導く現任教育の特性を明らかにしようと考えた。

（５）スーパービジョンにおける省察的実践を導く特性

文献研究と質的研究をとおして、スーパービジョンの管理・教育・支持という３つの機能から省察的実践を導く要素を分析した。その成果は以下のとおりである。

まず、教育的機能における省察的実践を促進する役割は、これまでの実践や経験をふり返りながら省察や探究を深め、実践知や暗黙知を言語化していく側面と、未来の具体的対策や戦略を検討する中で、実践で活用できる

レパートリーを増やす側面（preflection）とまとめた。

次に管理的機能については、空間や時間、職場内の関係など省察を促進する組織や体制を整備する役割があげられる。また、環境に対する省察、特にシステムに対するクリティカルな視点や変革の姿勢など、組織に対する批判的省察（critical reflection）を促進する役割があることがわかった。

そして支持的機能には、スーパーバイジーの感情表出を励まし、感情への気づきや認識を支え、自己覚知を促す役割がある。省察を深めるために、他者との相互作用による環境の重要性が指摘されていることから、支持的機能は省察を促進するソフト面の環境整備に寄与すると整理できた。

以上のことから、スーパービジョン機能にみられる省察的実践を導く特性を、図１のようにまとめた。

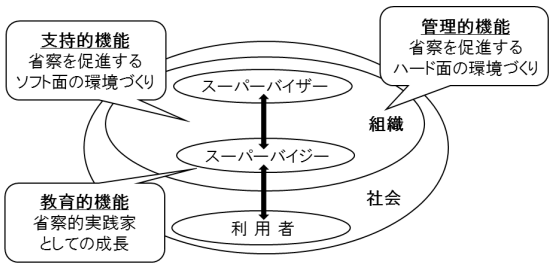

図１　省察的実践の実践を促進するスーパービジョンの役割

（６）省察的実践を促進する教育モデルの特性

これまでの研究成果をふまえ、省察的実践を促進する教育モデルの特性として、以下６点が提示できた。

①目的：実践の向上を目指した省察的実践家としての成長・発達
②焦点：省察的実践家としてのスクールソーシャルワーカーの成長から、省察を促進する所属組織や地域システムづくりへの視野（ミクロ・メゾ・マクロの視点）
③関係：二者以上の相互作用による、省察や意見を受け入れる姿勢の醸成（ソフト面の環境づくり）
④方法：他者との対話と自己との対話からの、新たな知見の獲得や実践知の言語化の促進
⑤展開：実践のふり返りをとおした省察の力の向上と、未来の実践の探索による実践レパートリーの広がり
⑥特徴：クリティカルな視点をもった自己と環境の変革

特に④方法に示したとおり、省察的実践を促進するスクールソーシャルワーカーの現任教育方法には、他者との対話や自己との対話をするなかで、新たな知見を獲得することと実践知を言語化することが重要と考えられる。また、新たな知見を獲得するなかで、クリティカルな視点をもちつつ、自己基盤やシステムの変革を視野に入れた取組みが、省察的実践の促進には重要といえる。そして、その⑤展開では、過去・現在のふり返りのなかで省察の力を向上させるとともに、未来への視座から実践レパートリーを獲得していくことが、「行為のなかの省察」を行う力量の向上につながるのである（図２参照）。

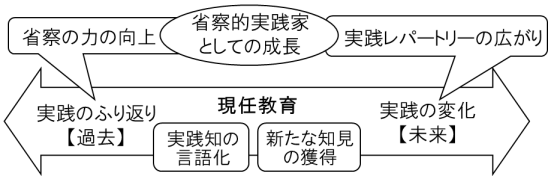

図２　省察的実践を促進する現任教育の方法展開

（７）今後の課題

本研究では、省察的実践の理論的特性や現任教育にみられる省察的実践を促進する要因の分析から、スクールソーシャルワーカーの省察的実践を導く現任教育方法モデルの特性を提示できた。一方、研究を進めるなかで、省察的実践を構成する要素が曖昧であるという課題がみえてきた。それゆえ、省察的実践がソーシャルワーカーによってどのように現実化されるかは十分明らかにされていない。そこで今後は、省察的実践の構成要素とその関係性を明らかにするとともに、省察を支援する実践ツールの開発により、実践現場で活用可能な省察的実践の方法を追究することが課題と考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

・加藤由衣「スクールソーシャルワークにおける省察的実践の意義－省察的実践の特性分析から－」『高知県立大学紀要 社会福祉学部編』（査読有）65, 2016, 43-57.
・加藤由衣「省察的実践を志向したスクールソーシャルワーク現任教育方法の研究」『地域ケアリング』（査読無）５月号, 北隆館, 2016, 76-79.
・山口真里・加藤由衣・西梅幸治「ソーシャルワーク教育における実習スーパービジョンの意義と課題－スーパービジョン過程での省察に焦点を当てて－」『広島国際大学医療福祉学科紀要』（査読無）13, 2017, 41-55.
・加藤由衣「省察的実践を促進するスーパービジョン機能の検討－スクールソーシャルワーク実践に特化して－」『高知県立大学紀要 社会福祉学部編』（査読有）67, 2018, 57-71.
・山口真里・西梅幸治・加藤由衣「コンピテンスを涵養する実習スーパービジョン－ソーシャルワーク教育におけるコンピテンス概念の検討をとおして－」『広島国際

大学医療福祉学科紀要』(査読無) 14, 2018, 29-44.

〔図書〕(計２件)

・太田義弘・中村佐織・安井理夫編, 加藤由衣他『高度専門職業としてのソーシャルワーク－理論・構想・方法・実践の科学的統合化－』光生館, 2017, 123-130 (第 10 章 1, 2), 147-153 (第 12 章 1, 2)

・櫻井慶一・宮﨑正宇編著, 加藤由衣他『福祉施設・学校現場が拓く児童家庭ソーシャルワーク: 子どもとその家族を支援するすべての人に』2017

６．研究組織

(1)研究代表者

加藤　由衣 (KATO, Yui)

高知県立大学・社会福祉学部・助教

研究者番号：30611991